

ミステリ読書案内

2022. 8. 21 発行元

第388号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

谷瑞恵「異人館画廊」

6月に集英社オレンジ文庫から谷瑞恵の『異人館画廊』の最新作『星灯の夜をきみに捧ぐ』が出た。谷と言えば『思い出のとき修理します』シリーズが有名だが、この『異人館画廊』も上質の出来だ。

谷瑞恵という作家…

谷瑞恵は1997年ごろからライト系の作品で活躍し始めた作家で、当初から物語作りのうまさで人気を集めてきたようである。私は『思い出のとき修理します』（集英社文庫）と『異人館画廊』しか読んでいないので、全容について語ることはできないが、幅広い知識と生活経験を踏まえた中身の濃い作品を書いているように感じる。

ミステリの枠にはあまり拘っていないようである。

「異人館画廊」シリーズ…

私がこの『異人館画廊』シリーズが好きなのは、「絵画ミステリ」という部分に魅かれているからである。主人公の此花千景は、小さいころの記憶を失い、両親に捨てられた形で生活しているが、イギリスで「肖像学」を学び、日本に帰国した18歳の女性。祖母の経営している

「異人館画廊」で生活しながら、自分のこれからの生き方を模索している。彼女の成長の記録。

「肖像学」というのは、人の潜在意識にはたらきかけて心を手繰るような絵画を研究することで、多くの場合、その絵を見た人を苦しめたり、不幸に陥らせたりする危険性をはらんでいるということだ。

これまでのシリーズの中で、悪意に満ちたいろいろな仕掛けなどの事件に立ち向かってきている。登場人物の幅はそれほど広くなく、固定メンバーがしっかり千景を守ってくれている。

「カラヴァッジョ」の絵画

今回のテーマはカラヴァッジョ。世間的にはよく知られている画家とまでは言えないかも知れない。ルネサンスよりは少し後の時代のイタリアの画家で、レンブラントなどに繋がる役目をはたしている。私もそれほど見ているわけではないが、

『異人館画廊』シリーズ

1. 盗まれた絵と謎を読む少女
2. 贋作師とまぼろしの絵
3. 幻想庭園と罠のある風景
4. 当世風婚活のすすめ
5. 失われた絵と学園の秘密
6. 透明な絵と墮天使の誘惑
7. 星灯の夜をきみに捧ぐ

最初は集英社コバルト文庫がスタートだった。その後オレンジ文庫に移行。ライト系文庫の中では任期シリーズになっていると思う。

強いインパクトのある絵が残されている。その未発見作品とか…今回の探し物になる。

もうひとつのテーマは「アウトサイダー・アート」。正式の美術を学んでいない人たちが描く作品。世の中には、さまざま作品がある。

第一部の完結で…

帯には「第一部完結！」と書いてある。千景はイギリスの恩師・ヘイワード教授に論文を提出したらと声をかけられていて、どうやらその流れに進んでいきそうである。第二部がいつスタートとすることやら。谷瑞恵は速筆ではないので、次作が出てくるのには少し時間がかかりそうに思うが。

北山猛邦「月灯館殺人事件」

6月に星海社から出た本。「令和の新本格カーニバル」と銘打たれた企画の中の一巻。ソフトカバー本で値段が安いのはとても良いが、葉がちょっと太すぎのような気もする。北山の「本格もの」に真正面から取り組む姿勢は高く評価できる。

「雪の山荘」のテーマ。途中までは基本パターンに乗った流れ。本格ミステリの大ベテラン・天神人が所有する深山の館・月灯館。そこに若手作家七人が集められ、創作に打ち込むという。まだ一作しか本を出していない弧木雨論という人物が月灯館にたどり着くところから話はスタートする。出会うのは変わり者ばかりの作家たち6人と使用人の執事とメイド。天神とその息子を含めて全部で10人。冬至の夕食会の場で「本格ミステリ作家における七つの大罪」という不思議なメッセージの音声が発せられ、そこから惨劇が始まる。大雪の降った次の日の朝に天神の遺体が密室状態の部屋から発見される。十字架に逆さまに張りつけられた形でシャンデリアに吊るされていた。しかも首が切られており、その首は行方不明。作家たちの協力体制は構築できず、電話線は切断され、執事が雪上車でふもとに向かって出発したが、その後消息は不明。そうしている間に第二、第三の殺人が…。過去の事件、隠されていた書斎の部屋、次々と新しい事実が判明してくる。

中心になっているのは何といても「密室」。密室のトリックが4つも使われている。図入りで解説があり、「なるほどそうか」と思わせる丁寧さ。そして、人物の……。もうこれ以上はネタバレになる。「新本格カーニバル」の看板に偽りはない。去年、今年に出版された本格ものミステリの中でも上出来のもの。